

私の敵だ。』

嫉妬の心は戀愛の鎖を喰ひ切つて復讐の念に變らうとしたが、無限の魅魔、自然の神に授けられた溶ろかすやうな力のあるマノンの容姿、その幻が直ぐシユバリエを戀愛の奴隷たらしめる。悲哀と燥暴の爲に昏亂した彼れの心は、過度の困憊から妙に平安な意識を復活させた。さうだ、マノンは自分も賛成してG—M—の處に遣つたのだ、マノンのこれ迄の不貞な行動から見れば決して今度のばかり特殊なのではない、もう一度マノンに逢はう、あつてよく糺さう、だが此の女を何うしよう自分がマノンに逢ふ前に此の女をG—M—に逢はしてはよくない、少しでもG—M—に警戒心を深くさせては駄目だ、かう決心した彼れは、懷から澤山の金錢を出して、彼れの動靜を不安さうに見守つてゐる美人に與へた。すると美人は悲しげな聲で、

『いえ私は斯様にお金を戴く譯がございません、私はあなたが愛の代りに下さる物は何の様な物でも欲しくはございません。』
彼の女は受取らうともしない。よく見れば涙さへ流してゐる。シユバリエは突嗟の氣轉で、

『そんな堅い言を云ふものぢやない、裏切られた残念さで私は非常に寂しい、何うかそれをお前に依つて慰められたい、今すぐにお前と共鳴して行く譯にもならないから、町の名と番地とを聞かせておいて呉れ、すれば、私は少し心を鎮めてから、今夜遅く訪ねるから。』
かう云つて靜かに彼の女の背中をなで、やつた彼の女は瞞されるとも知らずに、急に晴々しくなつて、呉々も來てくれるやう約束して、與へられた金を受取つて歸つた。

それを見送つたシユバリエは、待たしてある馬車に乗り、G—M—の匿家さして慕然に走らせた。日はもう暮れてゐた。

今彼れは欺瞞者の家の入口にかゝつた。心頭に燃えたつ怒氣を押えながら、叮嚀に案内を乞うた。天は彼れを見捨てる程慘酷でなかつた。取次に出たのはマーセルであつた。

『おゝ旦那様！』

「シッ！、静かに、マノンは何處に居る、至急會はねばならぬ事があるのだ。」

（旦那様、それは好都合、今しがたG—M—様が出て行かれた跡なのです、T様から何か急な用でお使ひが参りましたね。」

『さうか、それは幸ひだ、早く案内してくれ。』

彼れはマノンの部屋に突然現はれた。何と云ふ不思議な女であらう。マノンは少しも驚かない。

『冒險ね、あなた、でも嬉しいわ、何うして斯様な事なされるの、無鐵砲過ぎますわ。』

マノンが優しく抱擁しようとするのを、シユバリエの耐えくた激怒が爆發して、それを突き退け、その不貞を責めようとしたが、唇が何うしても動かない、彼れ自身でも不思議に思はれるほど沈黙が続いた。併し其の眼には言葉以上の力強い怨恨の焔が燃えてゐた。突き退けられてマノンはだち／＼となつたが漸う身體を支へ大理石像のやうに突立つたまゝ、怖ろしい物にでも會つた時のやうに眼を睜つて、口許に軽い痙攣を起してゐる。顔色は見る／＼生氣を失つて蒼白く變つて来る。シユバリエは愛と嫉妬と憎悪との三ツが頭の中を馳け廻つて、どれが自分の本當の感情なのか判らなくなつた。けれども愛は確に蹂躪られたと思ふと。

『マノン！』

憤りの聲が迸つた。

『よくも私を裏切つたな！ その美しい顔で、その優しい聲でよくも私を瞞したな！、貴様の腐つた魂は遂にこのシユバリエを殺してしまつた、祝へ、そして飽

くまでも歡樂を貪れ、黄金の輝きの前には何の權威もない貴様の爲に貴い半生を犠牲にしたシユバリエはな、今宵を限り葬られるのだ、よつく憶えておけ、貴様のその歡樂の夢もやがては醒めて悔いる時が来るのだ、おゝ！貴様は泣いてゐるな、その涙！、その偽りの涙は幾度私を悩ましたか、生涯を約した戀人に死滅の苦惱を與へて置いて、たとへそれが純眞な涙であるにしても、もう遅い、お目を開いて茲に居る私を見よ、戀に破れた敗残のシユバリエを見よ、マノン貴様はこれで三度目だ、今度といふ今度はもう忍ぶ事が出来ない、あれ程忠實な熱愛を詐欺で酬ゐるとは何事だ、忘れようとしても忘れられない、この胸の痛みを永久に取去る事が出来ないのだ。』

斯う云つて彼れは椅子の上に倒れた。マノンは黙つて聞いてゐたが、シユバリエの倒れたのを見ると、自分も崩れるやうに倒れて、両手で顔を蔽つた。その刹那に彼の女の涙は瀧のやうに降つた。そして泣き続けながら、

『あなた！、それは餘りです、違ひます、いゝえ違ひます、私の考へが悪かつたのです、何うぞ赦して下さい、斯様になつてしまつては自分の正しいと思ふ事をいくら申上げてでも嘸かし信じて下さりますまいが、私は戀人を偽瞞さうなどと、そんな、そんな、あゝ苦しい、あなた、どうぞ赦して下さい……。』

云ひさして後が續かない。

『黙れ、何と云ふ怖ろしい嘘つきだ、眞實心の露程もない貴様が、よくもそんな白々しい言がいはるな、そんな高尚らしい考へは捨て、しまへ、私を嫌つて嫌つて嫌ひぬくが、いゝ、そして今度の新しい戀人と仲よく暮せ、私はこれで貴様の嘘の眞底まで明白見る事が出来た、これから先き貴様を爪の垢ほども戀人だなどと思はぬぞ、賣女め。』

マノンは慌て駆け寄つて、彼れの膝に顔を埋め。潜々と泣き洗んだ、呼吸も出来ないほどぶる／＼震へ乍ら、やがて、涙に濡れた悲しげな眸で、シユバリエをちつ

と視詰めた。その刹那、俄然、シユバリエの感情は動いた。此の瞬間に彼の心は全く別の方面に興奮してしまつたのである。マノンには泣きながら彼の手に接吻した。

『マノン、マノン、お前は何と云ふ浮り氣な女だ、そのお前の悲みは、自分でも判るまい、あれ程堅く結んだ二人の誓をお前は忘れたのか、このうらぶれ果てた私を憐れとも思はないか、え、もう一度優しいマノンに返ることは出来ないか、マノン私はもう氣が狂ひさうだ、この胸が張り裂けさうだ——』

矢庭にマノンはシユバリエを抱き締めた。そして熱い接吻を幾度もして、

『あなた！』

と叫びざまに泣き崩れてしまつた。嗚咽は激しくなつて絶え入るやう。再び蒼ざめた顔をあげ。

『私が悪うございました、あゝ神様私のこの偽りのない胸の中を證して下さい、あなた！、私は露程もあなたを欺かうなどは思つてゐません、二人の爲によかれ』

とした事が私の念の足らなかつた爲、斯様にあなたをお苦めしようとは夢にも思ひませんでした、どうぞ赦して下さい。』

シユバリエの心は初めの態度とすつかり正反對になつた。極端から極端に彼れの感情は走つて、いきなりマノンを抱き起し、椅子に腰掛けさせ、自分もその側に掛けながら、真心籠めた優しい聲で、

『私はお前を愛する事が深いだけ、裏切られる苦痛も亦た大きいのだ、私は信じてゐる、此の世の中に私程お前に對して熱愛を捧げ得る者は二人とあるまい、それなのに、お前は度々私を欺くではないか、今度の事などは一番酷い仕打だ、位置を換えてお前が私になつてごらん、何の位、辛いか、判るだらう。』

この情熱の籠つた言葉にマノンは返事も出来なかつた。シユバリエは尙ほも

『お前が若し悪かつたと反省するならば、私は喜んで赦す、私の運命を支配するのはお前だ、私の悲みも樂みも皆なお前次第だ、私を生かすのも殺すのもお前の手一

つだ、ね、マノン、何うか一夜でも私の戀敵のG—M—と一所に居る事をやめてくれ、さあ、G—M—の歸らないうちに早く逃げてしまはう。』

マノンは暫らく考へてゐたが、昂奮した感情の鎮まるのを待つて、靜かに口を開いた。

『何んといふ優しい方でせう、其様にあなたが思つてゐて下さるのに何うして私に異存がありません、ですけれど少し考へさせて下さいまし、G—M—は却々歸らない事になつてゐますから、私……最初からあなたが、さう判然云つて下さいましたら、あんな御怒りも御苦しみもおさせしないで済んだのでしたわ、私は本當に何うなるのかと思つて、あなた、あの手紙で怒つてゐらつしやるのでしたら何うぞお赦し下さいまし、私、まさかあなたが、彼様なもの本當になさうとは思ひませんでしたもの、戯談にしてお取り上げになるまいと思つてゐましたもの何しろG—M—の前で書かされたのですから、何うしてもあんな風に書くより仕

方がなかつたのですわ、それも私、こゝへ來て見ますと餘り立派な物が澤山ありますのでつひ欲が出てしまひましたの、來ると直ぐに二萬フランのお金を呉れましたから、私、それで思ひ切ればよかつたのですけれど、お金だけでは何だか物足りないやうに思はれましたものですから、芝居の事を中止したのでしたわ、でもあなたを一時間でもお待せしては濟まないと思つてうまくG—M—を説いて、今日あなたと二人で散歩に出て八時頃劇場の側で待ち合す約束で別れたのだからきつと待つてゐるだらうから、マアセルを使ひにやつて私かもう歸らない宣告をしようと思ひますと、G—M—はそれもさうだがと考へて、が、シユバリエ君も今お前に別れては多少淋しいだらうから以前私の持物であつた美人を送らう、さうすれば先、交換問題になる道理だから恰度い、といつて私にあの手紙を書かして其の女に持たせてやつたのですわ、でもあの女は却々の美人ですけれど、私はあなたの本當の愛を持つてゐるのですもの、些とも心配はなかつたのです。』

マノンは一息をついて

『すると、そこへTさんからお手紙が参りまして、何でも賭けで大層敗けたとかで、至急お金の調達を頼むと云ふのでした。G—M—はぶつく〜いつてゐましたが、友達の困つてゐるのを捨て、も置かれなとか云つて時計を見てゐましたが、銀行がもう閉つてゐるから本邸に寄つて行かなくては間にあはない、淋しいだらうが十一時まで待つてゐて呉れ、決して私に外出しないやう呉々も云ひ置いて出て行きました、それで私、いゝことを考へ付いたのよ、あなた賛成して下さい。』

彼の女はシユバリエの打解けて来た容子に氣も軽くなつたらしく話蒐けて来た。シユバリエはこの話を一言も聞き漏らさないやう聞いてゐたが、其の幾分かは確かに惨忍性のあるのに氣付いた、少くともマノンは自分に對して不貞を働いても平氣でゐると云ふ風に見える。だが餘り責める氣も起らなかつた。話を一通り聞いて見

ると尤にも思へる。斯んな手段はマノンに有勝の事だ。そしてG—M—の意志を彼の女に知らしたのも自分で、彼の女のこゝに来ることに自分も援助したのだ、から考へて来ると、シユバリエ自身にも悪い事があるやう思はれて来た。たとへ彼の女にどんな缺點があつても、愛に輝いてゐるシユバリエの眼にはそれが缺點に見えない。遂にシユバリエはその總てを許してしまつた。そして彼の女の考付いたと云ふ話を聞いた。それは餘り彼の氣乗りのしない話だつた。が、間もなく彼はマノンを残して出て行つた、一體、それは何様な話だつたのだらう。

夜は更けた。G—M—が一人の下僕と急いで匿れ家——マノンに與へた——のあの町の入口に差かゝつた時、突然覆面の男が三人現はれて、一樣に手にしたピストルをG—M—の胸に擬した。其のうちの一人は、鋭い調子で

『おい、G—M—、僕たちは金や物品を望むのではない、只少し貴様の身體に用があつて連れて行くのだ、命が惜しいと思つたら穏順くしろ、聲を立てるとすぐこ

のピストルを放すぞ。』

怖ろしい凄味のある聲に驚かされてG—M—は何の反抗もせず、羊のやうにひかれて行く、下僕は膽をつぶして一散に逃げてしまった。

其の夜恰度十時半頃、本邸の表門へ飛び込んだ下僕は、息をもつかずに老紳士の部屋に馳けつけた。老紳士はまだ寢ずにゐた。そして、この不意の訪づれに驚き乍ら、直覺的に息子の危難が察せられた。

『何うしたのだ、あはたゞしい。』

『だ、旦那様！、大變でございます、い、いま若旦那様が曲者に連れられて行かれました。』

『なに！、息子が曲者に連れて行かれた！、おい、何處へ連れて行かれたのだ。』

『そ、その行先は分らないのでございます、實は……』

と先刻の顛末を殘らず告げた、G—M—老紳士は夜更けに息子が尠なからぬ金を持

つて行く事が不安に思はれて、此の下男をつけて遣つたのだ。G—M—は父のこの親切が實は甚だ迷惑でならなかつた。それは今夜、マノンと樂むつもりで本邸へは歸らぬ積りなのを、連れて行くとする矢張歸らなければならぬからだつた。で、止むを得ず、自分に戀人の出來た事を下男に話して、飽までも父に秘密にしてくれらるやう頼んで、匿れ家の方にやつて來たのだつた。下男は、其の場の怖ろしかった様子を震へながら話して、遂にその戀人がマノンと云ふ世にも粹な美人であると聞いたと附加へた。今まで腕組して。頻りに耳を傾けてゐた老紳士は、マノンの名を聞くと、彈かれたほど驚いたが、そしらぬ顔で

『よく解つた、で、なにか、伴が何の方面に連れて行かれたかそれも知らぬか。』

『はい、それは存じて居ります、若旦那の御話になつたその家とは反對の方へ引つ張つて行つたやうでございます。』

『はてね。』

と老紳士は暫らく考へてゐたが

「兎に角お前は至急馬車の用意してくれ、それから誰かに電話で警察の署長に乃公からちやといつてすぐ俵の搜索を始めるよう傳へさせて呉れ。」

「はい、畏まりました。」

「お待て、それから、お前は乃公と同乗してその匿れ家を案内してくれ、略ぼ乃公には見當が付いてゐるのぢや。」

下男は、あたふたと部屋を出て行つた。老紳士は自分の引懸つた手段に息子が乗つたのだと察した。今度のはそれがもう一層手酷しい悪辣な方法で行はれて、息子の身に變事でも起らねばよいがとそればかり氣づかはれた。

「怖ろしい毒婦ぢや。」

彼れは呟いて。馬車の用意の遅いのに氣を苛ち、部屋の中を歩き廻つた。

「準備が整ひました、警察の方は手分してすぐ活動すると申しました、只今こちらへ

も警官がお見えになりました。」

「そうか、では一所に行つて貰ふ事にしよう、途次話をすればよいから。」

老紳士に下男、四人の警官とを乗せた馬車は、一散に匿れ家の方に駆け出した。

G・M：が災厄に會つてから凡そ二十分ばかりの後、マノンの部屋では、マノンとシユバリエとが話しあつてゐた。

「實際うまくいつたよ、有繋はレスコー君の部下だけあつて、鮮かなものだつた、影に忍んでゐた私でさへ、ぞつとする位、よく彼様に落付いてやれるものだね。」

「私の計畫はうまく行つたでせう、これで安心して今夜は泊つて戴けますことよ、明日までは大丈夫ですもの。」

「それは安心なものさ、彼れ等はG・M：を倶楽部に連れて行つて、監視しながら夜明まで飲み続け、明日の晩方放還する事になつてゐるのだ。」

「なら、大丈夫ね、明日の朝はなるべく早く起きて持てるだけの物を持って逃げ出

してしまひませう。』

其の時突如玄關先で騒々しい人聲が起つた。忠實なマーセルが慌たゞしく馳け込
んで来て、

『奥様、旦那様！、大變です、警官がやつて来ました、早く、早くお遁げなさい。』
荒々しい聲音は迫つて来た。萬事休す！ 三人の前に現はれたのはG：M：老紳
士である。遁る事も隠れる事も出来ない。老紳士は立竦んで三人をぢろり眺めて、
皮肉な冷笑を浮べ、

『どうせ、こんな事だらうと思つた。シユバリエにマノン、よく君等のやうな無頼
漢が生きてゐられたの、御商法に熱心と見えて、復た乃公の眼にとまつた。乃公
もこれでやつと安心した。お前達の細工ぢやらう倅を隠したのは。何處へやつた
のだ。さあ白状しなさい。これ、何とか返事をしないか。』

シユバリエもマノンも驚きの餘り茫然して言葉も出なかつた。マーセルは此の場

の様子に極度の不安を感じて、がた／＼震へてゐる。

『やつ。』

老紳士は頓狂な聲をあげた。

『これは、驚いた、おい、そこに正直さうな顔をしてゐるのはマーセルぢやない
か、いや、どうも不可思議な對照ぢや、マグダレンの牢獄ではお前とマノンと戀
の道行をしたのぢやと、偉い評判ぢやつたが、して見ると三人でうまく謀つた仕
事ぢやつたな。』

と嘲笑ひながら、警官を顧み、

『お手数ぢやが、彼れ等を逃げないやう縛つて下さらんか、そしてあの下男だけ別
の部屋に入れておいて下さい。』

といつて二人を指し、

『此の二人は息子の在所を知つてゐるに違ひない、今すぐ息子を何うしたか白状し

なければ、明日にでも絞首臺に送つてかまはない。』

『何！ 絞首臺。』

今まで凡ゆる嘲罵を黙つて聞いてゐたシユバリエは、憤然として飛蒐らうとした。すわとばかりに警官は一度にシユバリエを縛つてしまつた。老紳士は泣き崩れてゐるマノンの側に寄り、氣味の悪い皮肉な調子で、

『おい、マノン、よくもお前は私達親子を瞞したの、恐れ入つた凄腕ぢや、乃公はその御禮に何か君達の幸福を計つてあげたいと思ふが、差當りよい方法もないから、ほんの印だけに先づシヤトル牢獄の別荘に入れてあげよう、暫らくそこで静養するがよからう、乃公はその間に何か變つた趣向を考へて置かう。』

と云ひ捨て、マーセルの連れて行かれた方に行つた。

暫らくして室に歸つて來た老紳士は、二人を見張つてゐた警官に、

『いろ／＼お骨折をかけてお氣の毒ぢやつた、しかし息子の居所は判然つたで二人に用が無くなりましたぢや、だが此の儘赦してやると復た何んな悪事を働くか知れぬから、早速牢獄へ送つて下さい、二人共一度脱獄した事のある前科者ぢやから、よく注意してね。』

憎々しい嘲笑を二人に浴びせて、出て行つた。シユバリエはそれを追はうとしたが、既に身は縛られてゐた。側には正體なく泣き崩れたマノンが居る。彼れは牢獄の事を思出すと、逆もマノンを正視するに忍びなくなつて顔を背けた。

『おゝ、マノン！』

シユバリエが何か言はうとした時、無慈悲な警官は二人を遠ざけてしまつた。泣き狂ふマノンも犇々と縛られて、二人は箱馬車の中に入れられた。マノンはG：M：老紳士が姿を現はしてから此の時まで一語も出さなかつたが、二人限りだと氣がつくと漸く口を開いた。

『あなた！ 赦して下さい、斯様な事になつたのも皆な私故です、私が悪いばつか

りに貴下に斯様な憂い思ひをおさせするのです、私何うしたら、あなたに、あなたに……」

彼の女は復た新しい涙に咽んだ。

「何あに、私なんぞの事はどうでもい、が只氣の毒でならないのはお前だ、私は、お前が可哀想でならない、この美しいお前を、何と云ふ果敢ない運命だらう、なせ斯様に酷たらしく虐めるのだらう、あ、私の心は張り裂けさうだ。」

二人は相擁して泣く事さへも出来ない。泉のやうに湧き出る涙は止度なく頬を流れる。

「マノン何うせ牢獄に行けば復た二人の體は別々の所に置かれるのだ、嘸ぞ淋しい思ひをすることだらう、だが、マノン、私の力を信じてくれ、必ず私はお前を救出して見せる、生家の勢力さへ借りれば此の身の自由になること位は直ぐ出来るから、ね、少しの間辛抱してくれ。」

馬車は憂愁の思ひに沈む二人を乗せて牢獄に着いた。到頭、二人は別々な獄房に投げ込まれた。

シユバリエは、焦だつ心を鎮めて冥想到つた。冷静に考へた末思切つて一切の事情を具して父に哀願した。此の報を受けた田舎の父は、老の身を巴里に運んで赦免の手續を計つた。老貴族の勢力は連もG:M:父子の及ぶ所でなかつた。彼れ等は自分達の名譽に傷のつかない程度で妥協した。日ならずしてシユバリエは自由の身になつた。其の時、マノンの生涯は、取除く事の出来ない悲惨な運命に覆はれたのである。彼の女は終身流刑の宣告を受けたのだつた。勿論それはG:M:老紳士の裏面に於ける呪ひのためだつた。自由の身になつたシユバリエは、早速マノンを救出す事を父に懇願した。峻厳な父は餘りの圖々しさに呆れたが、哀れな愛兒の狂態を見て様々に諭した。だが流石に恩愛の情に絆されて。マノンが流刑に處せられた事は聽かさなかつた。それは、戀に熱中してゐる彼れの感情に忌はしい變動があ

つてはならぬと考へたからである。しかしシュバリエは、此の慈悲深い父の意に従はないで、飽くまでもマノンの爲に辯護した。溫柔い父も遂に怒つた。最後に『生きて再び私の前に来るな』とさへ云はれた。それが彼には別段の苦痛にも思はれなかつた。父は此の墮落のどん底に落込んだ彼れの到底救へないことを悟つて悄然として旧舎へ歸つた。

シュバリエは、父に見離されたけれども、そんな事で一切を諦めることは出来な
い。彼れはTに依つてG:M:父子を説いて貰はうと、急いでTを訪問した。既に
Tは一切の事情を承知してゐた。彼れは今度の惨めな結果がG:M:を照介したこ
とから起つたのだとその責任を感じてゐた。で二人を救済するべくシャトルの牢獄
に出かけて行つた。其の時はもうマノンの罪も決つてゐたので、どうにも出来な
かつた。Tは快くシュバリエを迎へて静かに彼れを慰めた。そして流刑に決つた事
を知らずに居る容子なので酷く當惑した。何んな風に知らずのが一番彼れの心を痛

めないだらうと色々考へてみたが思切つて、

『シュバリエ君、君の意中はよくお察しする、しかし今云つた通の始末で、私の力
ではもうなんとも出来ない、此の上は君の努力によらねばなるまい、それもごく
僅かな天祐にでも依らねば所詮だめだらうと思ふ、君あのマノン嬢はアメリカに

……』

シュバリエの沈痛な顔を見て彼れは口籠つた、シュバリエは苛々して、

『君、マノンは何うしたのだ、アメリカが何うしたと云ふのだ。』

『實はね、君驚ろいちやいけないよ、終身流刑の宣告を受けてしまつたのだ。』

『えッ！、終身流刑！』

猛烈な驚愕の爲にシュバリエは意識を失つて倒れてしまつた。

T:の介抱に依つて意識を恢復したシュバリエは、冷やかな微笑を浮べて、大き
な嘆聲を漏らした、

「君、難有う、一切は解決した。私の苦悶も根柢から取り去る事が出来た、愈このシユバリエも世間から永遠に忘れられる時節が来たのだ、永らく君にもお世話になつた、御厚情は迎も言葉では云ひ盡せない、私は今となつて其の友誼に酬う事の出来ないのが非常に残念だ、だが仕方がない、君とも永久にお別れしよう只御健在を祈るばかりだ。」

彼れはかういつてよろしくと立上つた。Tは此の異様な言動に驚いて急いでシユバリエを留めて、

「君、なせ其様な詰らない事を云ふのだ、君の精神の動亂はよく解つてゐる、解つてはゐるがこの位の悲みの爲に君の肉體まで變化があつては取返しがつかないぢやないか、まあ氣を鎮めたまへ、斯様な事が御老父にでも聞えたら何の位嘆かれるか知れやしない。」

シユバリエは暗然として、

「いや、御親切に難有う、決して私は無謀な事はしない、だが心配して呉れた父にも、既に私は見離されたのだ、この廣い廣い世の中に唯つた一つの樂も破壊されたのだ、もう誰も恨むまい、何事も運命なのだ、ではこれで失禮する。」

「何、御老父にも見捨てられた、それはほんたうか。」

Tは暫らく考へてゐたが、財布を取出して、シユバリエに渡しながら、

「シユバリエ君、もう何事も云ふまい、理智に明るい君だから、輕擧は慎んで呉れるだらう、甚だ失禮だが、ほんの持合せだけだ、納めて呉れ給へ。」

「お、これを私に……難有う、頂戴する、もう日も暮れさうだ、では、お別れしよう、左様なら……」

「御機嫌よう……」

見送るTの眼にも涙があつた。

シユバリエの頬には、幾篠かの涙が流れてゐた。門口まで力なく歩いた彼れは一

寸振向いて、Tの視線とばつたり逢つたので、黙禮して漂然と出て行つた。

二二〇

五

それは巴里から餘程離れたパツシイと云ふ處だつた。十二人の身窶らしい女の一團が今箱馬車から降されて、一軒の宿屋に入つた。何の女も皆腰を鎖で索がれて、六人の荒くれた男に見張られてゐる。これはシャトルの牢獄にゐた女囚で、流刑に處斷せられて、アメリカに護送される途中なのだ。その中で特に目立つて、淑女らしさの氣品に富んだ美しい女がゐた。その身窶らしい服装が反つて自然の情緒をそゝる。それはマノンだつた。部屋の隅に悄然と腰掛けてゐる青年がある。彼れは華やかな巴里を捨て、其の戀人と運命を共にしたシユバリエの成れの果てである。閑寂な田舎町だけに近所の人々はこの小さな宿屋の門口に、一ぱいになる程押かけて來て口々に何事か罵り騒いでゐる。するとこの大勢の町人が、雪崩を打つて兩側

に退いた。一人の崇高い紳士は其の中を、悠たりとした態度で青年の方に近づいた。そして情深い力の籠つた聲で、

『甚だ失禮ですが君に少しお話したい事があります、お差問えはありますまいか。』と話しかけた。

『はい、差支はございません、御用なら承りませう。』

『さうですか、いや、今私がこゝを通りかゝりますと餘りの人だからなので門にゐた番人の一人に尋ねますと例の亞米利加行だとの話で、嘸ぞ悲しい運命に嘆いてゐられる方々だらうと思つてお慰めしようと思つたのです、お見受けする所、貴下は此の人々のお仲間でもないらしいですが、非常に御心痛の御容子なので、何か込み入つた御事情があたりだらうと思ひます、お差問えもなくばお漏らし下さい、いますまいか、私は巴里のローランと云ふ者です。』

巴里のローラン、シユバリエはこれを聞いて思はず直立した。その筈である。宰

相あひあでからさへ賓師びんしの禮らいを受けうける徳望とくぼうの高いローラン博士はかせなのである。博士はかせの慈悲じひは至いたる所に施ほされて、今日けふも此この憐あはれな人々ひとびとに同情どうじやうが動うごいたのだつた。

『は、お名前なまへは豫かねて承うけたまはつて居をります、只今ただいまは少し事情じじやうがありまして身分みぶんを申上まをしあげ兼ねかますが、實じつは永ながらく巴里パリに居をりました者ものでございませぬ、不思議ふしぎな運命うめいに弄もてあそばれた私わたしは到頭とうとう崇嚴そうげんな愛あいの誓ちかいの爲ために、あそこに居をるあのマノンと悲運ひうんを共ともにする事ことになつたのでございませぬ、親おやに捨すてられ友ともに離はなれた私わたしは流離りゅうりの旅たびに出でてから今日こんにち日までそのやうな慈愛じあいのあるお言葉ことばを受けうけた事ことがありません。御親切ごしんせつに甘うまえまして卒直そつちよくに申上まをしあげますが、私わたしは眞心まごころ罩こめてあの女をんなを愛あいし、其そのの爲ためには如何いかなる悲惨ひはんな運命うめいに沈しづむでも厭いとはない覺悟かくごで居をるのでございませぬ。私わたしはあれがシャトルに在あります時ときに何なにうかして自由じゆうの身みにしてやりたいと思おもつて様々さまざまな手段しゆだんを取りましたが駄目だめでした。それで私わたしは、せめても彼かの女をんなを慰なぐさめる爲ために自分じぶんも遠とよい亞米利加あめりかに渡わたつて悲かなしみを別わかけやうと決心けつしんしたのでございませぬ』

と更さらに友情いうじやうある中なかに別わかれた事こと、そして恵めぐまれた金かねも卑劣ひれつな番人達ばんにんたちの爲ために全部ぜんぶ費つひ果はしてしまつた事ことまで話はなした。唯ただ此この際きざ一縷いちるの望のぞみとしては巴里パリに居をる竹馬ちくばの友ともなるチベルヂと云いふのに最後さいごの無心むしんを頼たのんでやつたが、それが果はして送金そうきんして呉くれるか何なにうだか解わからない程ほど、マノンの爲ために友情いうじやうを無視むししてゐると附加つひくはへて語かたつた。

博士はかせの胸むねにひゞくこの痛々いたくしい物語ものがたりは、もう此この上うへ聞きくに忍しのびなかつた。

『よく御話おはなし下さいませ。あの三番目さんばんめに居をられるのがマノンと言いはれる方かたですか。

此この上うへあなたあなたの苦くるしいお話はなしを伺うかがふのも失禮しつれいですから、何か私わたしでお役やくに立たつ事ことを考かんがへましたか、旅先たびさきなので思おもふやうにもなりません、甚はなはだ失禮しつれいですがこのお金かねをお受取うけとり下さい。何れいつドグラスの港みなとから御乗船ごじやうせんの事ことと思おもひますが幸さいいひにあなたがあの御婦人ごふじんをお慰なぐさめになる幾分いくぶんにでもなれば結構けつこうです。』

博士はかせはそつと番人達ばんにんたちに知しれないやう二十圓にじゅうえんの金貨きんくわを出だしてシユバリエシユバリエに與あたへた。

彼かれは感謝かんしゃと共に受うけたのである。博士はかせは猶なほも番人ばんにんの一人ひとりを呼よんで即座そくざに十圓じゅうえんの

金を與へて戀人同志の談話の自由を約束させた。そして嚴然とした態度で、『で念の爲に云つて置くが、君方も此の十圓を受取つたからは、たとへ私が居なくなつても此の約束に違ふやうなことはありません、若し間違つたら此の青年から私の許に知らせが来る、さうなると亦た私にも相當な考があるから。』と云ひ渡した。

博士はこれで三十圓の金を見ず識らずのシユバリエに恵んだのだが、高雅なシユバリエの態度と淑やかなマノンの容子から決してその心盡しが無駄なことではないと思はせられた。そして謎のやうな二人の素性を深く心に殘して別れて行つた。シユバリエは思がけない博士の恵に依つて悲しい中にもマノンを慰めることが出来た。間もなく一行はドグラスの港に着いた。チベルヂの返事はまだ來てゐなかつた。彼れは到頭、思切つて自分の乗た馬を賣却して若干かの金に換え、遠い／＼旅に上ることにした。チベルヂには改めて一封の書状を送つた。

船は出た。海上二ヶ月無事に彼等は亞米利加に着いた。一行は海岸から餘程離れた山中のニウ・オレアンズの町に到着した。町の人々は親切に彼れ等を迎へて、故國の様子をわれ先にと聞くのであつた。シユバリエは先づ知事の邸宅に行く事にした。知事といつても僅かに五六百の人口を支配してゐるだけで、小高い所に他家よりは稍高く建てられた住居を構へてゐた。やがて一同の檢閲が済むと、知事はシユバリエとマノンを殘して他の者を去らしめた。そして嚴かな口調で、『俺は船長から聞いたが、君たちは夫婦ださうぢやね、君達があんな所に來る様なつたに就ては深い事情があるのだらうが、まあ、それは訊かぬでもよい、只だ君達を見たゞけでも立派な教育ある人と思ふ、殊に船長も君達の事に就ては、非常に褒めてゐた、見受けるところ、何うも勞働には堪えられさうもないから、何うだらう、役場に缺員があるがその書記にでもなつて見ては、ね、さうしたら別に細君に酷い仕事をさせないでも濟む譯だ……。』

異境の空にまで斯様な同情ある取扱を受けようとは二人とも夢にも思はなかつた。二人はたゞ感謝と驚異の念に打たれた。そして晚餐の饗應まで受けて愈々宛がはれた家に行つた。粗末な家ながら、知事の好意で一通りの手廻り道具も調つてゐた。

マノンには哀れな此の棲家の様を見て泣き出した。

『マノン、何うしたのだ、何を泣くのだ、え、もうこゝまで来ては、いくら嘆いても仕様がな、ね、もう巴里の事なんか思切つて眞の戀愛に生きようではないか。』

シユバリエは彼の女の背中を擦りながら眞心籠めて云つた。

『いゝえ、違ひます、私、私、決して巴里の事なんか思つて泣くのぢやありません、唯だ私のやうな愚かな者の爲に立派な貴下にまで斯様な惨な思ひをおさせするのが悲しくつて……』

『其様な事があるものか、私はこれで満足してゐるのだ、知事は彼様に親切だし、町の人々も優しくしてくれる、お前は私を愛してくれる、此の殖民地に來た以上は誰も寂しい思ひをするのだ、それなのに私にはお前と言ふ賜物がある、お前さへあれば私の眼にはどんな土くれだつて、みんな純金に輝いて見えるのだ。』

マノンは嬉しさうに

『本當にさうでせうか、さうでしたら私何んなに嬉しいか知れませんか。此の世の中で貴下の愛ほど強い愛を受けたことがありませんもの。私は貴下が戀しいと思へば思ふ程自分の罪が怖ろしくなつて來ます、過去の罪、それも淺慕な私の考が悪かつたばかりに、此の様な破滅に落ちました、あんな不貞操な眞似をした私に何うして貴下のやうな崇高い潔い愛を享ける資格がありません、私は本當に恵まれ過ぎてゐると難有く思つて居ります。こんな悲しい惨めな處まで來て下すつた御志に、何うして酬いたらいゝか、それを思ふとゐても立つても堪らなくなり

ます。

『マノン、其様に云つてくれるな、私はこれ以上、何にもお前に望む所はない、私は此處へ来て初めてお前の愛の全部を握ることが出来たのだ。もう私の幸福は永久に變らない、マノン私達の戀はこれで全く缺けた處のないものになったのだ。』私もさう思ひますの私達の幸福の源泉は何處にあるか、今漸とそれを見ることが出来ました、私はそれをもう死んでも離さないつもりで居ります。』

『全くだ戀愛の眞の味を知らうと思つたら、よろしくみんな。このニウ・オレアンズに來るべしだ。愛と幸福との天國は本當にこゝなのだ。』

斯うした事を語り合つた二人は、やがて心靜かに寢床に横はつた。

其の翌日からシユバリエは、役場に勤めることになつた。マノンとの間には至極平和な日が送られた。貴族的なシユバリエの温和な態度は。忽ち町人の好感を得て間もなく知事に亞いでの名望ある人として尊敬されるやうになつた。かうして單純

な職業に慣て素朴な生活を送つてゐるうちに、二人の心には自然と信仰の念が甦つて來た。元來マノンも非宗教的と云ふ程の女でもなく、シユバリエも青春の戀の爲に一時忘れてゐたと云ふに過ぎないのだから、かういふ單純な生活に入るに従つて、誠實な信仰心が強い力で起つて來た。シユバリエは或る日マノンに向つて、

『此の間からお前に一度相談したいと思つてゐたのだが、別段取急ぐ程の事でもないから、遂そのまゝにしてゐた、私達の生活に唯た一ツ缺けた處がある、それは聖壇で二人の結婚を神様に誓はない事だ、二人の強い愛の力は今こゝで改めてそれを行はねばならぬ事もないが、只だ私の心持が何うしてもそれを閑にしておけない、ことに人々は私とお前は眞の結婚者と見てゐる、茲に居るからは敢て佛蘭西の法律に認めてもらはなくてもよいが、尠くともあの親切な知事を僞つておく事は出来ない、私は今日にでもそれを済ましたいと思ふがお前何う考へるね。』

マノンは悦んで、

『本當に、さうですわ、私、こちらに參つてから一日でもそれを思はない日はありませんでした、ですけれども此の罪の深い私が、清い淨い御心のあなたと神様の前に立つ事が出来るか何うか信せられませんか、そんな勝手な事を私の口からは申上げられませんでしたもので。』

『お前もさう思つてゐて呉れたのか、早く私に聞かせて呉れ、ばよかつたに、なかに心配することは無い、此處に來たのが既にお前の爲の洗禮だもの、立派な道婦として恥しくないよ、それはお前の平常の正しい行が物語つてゐる。ではこれから知事の所に行つて話して來よう。そして明日にでも式を擧げることにしよう。』

シユバリエは、いそぐと出て行つた。此の事が動機で遂に全く二人の運命が破壊されようとは思ひも及ばなかつたのである。知事は幸に在宅だつた。丁度シン、ネレと言ふ知事の甥も來合せてゐた。

『甚だ突然で或は御立腹かも知れませんが、折つてお願ひがあつて參りました。』
シユバリエは成るべく知事の感情を損はぬやうかう云つた、

『ほう、大層改まつて、何んな用件ですかね、まあ俺で出来る事なら何なりとも御希望に應じませう、貴公が來られてから、町中の一般の氣風ががらりと變つて、十ヶ月位前までは一體に遊墮な者が多くて困つてゐたのちやが、皆な貴公の感化を受けたものと見え、非常によく働くやうになつた、で何か俺も貴公に酬いたいと思つてゐる矢先ぢや、何なりとも遠慮なく話して貰ひませう。』
知事の此の言葉にシユバリエは機を得て膝を進めた。

『誠に申上にくいのですが、實は私の妻はまだ正式の婚儀しなかつたのでございませう、こちらへ參つてから貴下にまで僞つてゐたやうな始末で、今では誰一人それを疑つてゐる者はありませんが、私の心は何うしてもそれを許しません、是非神様の前で誓はなくではならぬと思ふのでございます、私は此の事を御詫した上で

改めて擧式のお許しを得たいのでございます』

『あゝさうちやつたか、俺は又非常に重大な事で、もあるかと思つた、そんな事を心配なさる必要は少しもない、貴公方の美しい戀中は褒めぬ者はない、たとへそれが儀式を踏んでゐるやうがゐるまいが妻は妻、夫は夫、やつぱり立派な御夫婦や併し貴公の氣が濟まぬとあれば早速儀式を擧げられたは何うぢやな、其の歡の一部に俺も加へてもらいたい、差支がなかつたらその儀式の入費は俺が出したいものぢやが』

『恐れ入ります、差支どころか御許しを得ました上、そのやうなことまでして戴きましては……。』

『何んの、遠慮には及びません、差支がないなら、今日にも行ふことにしませう、幸、牧師に用があつて呼びに遣つた處ぢや、では、早速準備なされたがよからう、追付牧師には貴公の家に行くやう命じますから。』

知事は何時もの通り親切に云つてくれた。併し知事の側に今迄黙つて聞いてゐたシンネレの眼が異様に輝いたのは誰も知らなかつた。シユバリエは欣然として挨拶もそこ／＼歸つて來た。マノンも缺點だらけの自分が正妻の資格を得るのを夢かとはかり歡んで、そわ／＼とその準備を急いだ。シユバリエもこの薄幸な美人の振舞を見ると、うれしいやら悲しいやら、マノンの心を憐れまずには居られなかつた。程なく牧師は來た。

『御免を蒙ります、却々お忙はしいやうですな。』

牧師は冷やかな口調でかう云つたが、喜悅で夢中になつてゐる二人には、何の感じもなかつた。

『はい、お蔭で神聖な儀式を擧げる事が出來ます、何分よろしく願ひ致します。』
マノンもシユバリエの言葉について

『いろ／＼お世話様になりまして。』

と交々挨拶した。牧師は思ひも寄らぬと云つた顔付で

「これは意外な事を承ります、私はその打合で来たものではありません、知事からの命令をお傳へに來ただけです、知事は絶対にこの舉式には不同意です、そしてマノンに就ては亦た別に考へがあると傳へよとの事でした。」

「えッ!。」

「まあッ!。」

シユバリエとマノンは驚いて叫んだ。シユバリエは自分の耳を疑ふやうに、

「慥にあなたは今知事が不同意だと仰しやつたやうですが、私の聞き違ひではありまますまいか。」

「いや、決してお聞き違ひではありません、先刻あなたに云はれたことは一切取消して、改めてあなた方の結婚を否定すると云はれました。」

冷然と、しかも幾分か嘲の色さへ浮べて牧師は答へた、

マノンは黙つて聞いてゐたが、駭きのあまりシユバリエに縋り付いた。美しく輝いてゐた眸の色は恐怖の色と變つて、口許をしつかと結んだ。シユバリエは彼女を支えながら苛だつ心を鎮めて、

「そんな、そんな馬鹿げた話はありません、現に知事は私にこの費用まで出してやらうとまで云はれた位です、それは何か、あなたの御聞き違ひでせう、そんな事を云はれる筈はありません。」

「斷じて聞き違ひではありません、若し私の言葉を信せられないのでしたら、直接にお訊ねになればいゝでせう、私の使命はこれだけです、左様なら。」

牧師は嘲笑ひながら出て行つた。シユバリエは絶大な屈辱を感じた。そして自分の腕に絶つてゐるマノンの顔を見ると思はず嘆聲を上げた。

「不幸な者も數多くあるが、何故私達にはかう不幸が続いて來るのだらう。」
マノンは漸く顔を上げて潜々と泣きながら、

『御尤です、御尤です、本國に居られたら何のやうな快樂でも御自由に得られるあなたが見る影もない私を愛して下さるばかりに、こんな遠い國にまで来て、そうして又新しい迫害に逢はれるとは、何と云ふ不運な事なのでせう、私は自分の罪ゆゑと諦めもしますが、あなたには何とも申譯がありません、何うぞお赦し下さいまし。』

かう云つて更に新しい涙に咽んだ。シユバリエは凜として、

さう嘆かなくつてもいい、あんな牧師何を聞き違へて来たか知れたものぢやない、心配しないでいゝ私が今から行つて知事に逢へばその間違も直ぐ解る、一寸留守居をしてゐておくれ、直ぐに歸るから。』

マノンには飽くまでそれを止めて、眼に一杯涙を溜め、

『駄目です、駄目です、それはあなた死に行かれるやうなものです、あの知事の怒に逢へば、明日から私達は生きてゐられなくなります。私は決心しました、何う

ぞあなたの手で私を殺して下さいまし、私はもう何の樂もなくなりました、あなたの手に依つて永遠に眠ることが出来れば何の位の幸福だか知れません。』
 マノンのこの言葉は痛くシユバリエを動かした。マノンは今迄如何なる苦痛に逢つても死と云ふ感念を持つたことのない女だつた。それが、マノンのこの言葉は、自己の運命を豫言したものだつた。

悶える戀人を説き鎮めてシユバリエは知事の邸に馳けつけた。そして謙遜した卑屈な態度で眞偽を尋ねた。絶望！二人の戀は極端に破壊されたのだ。知事の甥シンネレはマノンに猛烈な戀をしてゐたのである。併しシンネレもマノンが法律上シユバリエの正妻であると信じて、強いてその想ひを殺してゐたのだが、内縁と知つて突如叔父の知事に結婚を申込んだのである。知事はこの愛甥の希望を聞いた時非常に困惑したが、遂に彼れの乞を容れ、職權を利用して、シンネレとマノンと結婚することに決めたのであつた。シユバリエは様々に哀訴したが、何うしても知事は

聞き容れなかつた。

『では何うしてもお許し下さる譯には参りませんか。』

シユバリエは昂奮した聲で問ひ返した。

『誠に氣の毒には思ふが、俺の意志はもう決したのぢや。斷じてこれを動かすことは出来ぬ。本國の罪囚として流されて來たマノンに絶對に俺の命令に服従せねばならぬ。併し貴公別に心配するに當らぬ、世の中は廣いもの其の内に復た何んな美人が送られて來ようとも知れぬ、其の時は、今度の代りに一番貴公の氣に入つたのを取り持たう、又たマノンも俺の甥と結婚するのぢやで今迄よりもつと幸福な身の上に成らうといふもの、貴公が本當に愛するならば、謂はゞマノンの出世を悦んでやつてもよからう、よくマノンにも得心させてやつて下さい。』

シユバリエは知事の利己主義の言葉に名狀し難い憤怒の痴呆的狀態に陥てしまつた。併し猶ほも、勇氣を出してなじるやうに、

『何うしても駄目ですか。』

知事はとんがらかつた聲で、

『くだい、貴公も解らぬ男ぢや、幾度いつても同じ事ぢや、それよりも早く歸つて、マノンを喜ばした方がよからう。』

なんでマノンが喜ばうか、到頭、シユバリエは此の亂暴な知事に逆らひ兼ねて悄然と其處を辭した。辭し去つた彼れには既に偉大な決心があつた。豫て知るシンネレの家の方に歩いて行つたが、とある物蔭に身を忍ばせた。

叔父の計らひでマノンを正しく自分の手に入れる事が出來ると喜んだシンネレは、自分の身にふりかゝる危険も知らずに知事の邸を出て悠然とやつて來た。

『さて！』

雷のやうに叫び聲と共に飛出したのはシユバリエだ。矢繼早に憤怒の聲荒く『シンネレ、恥を知れ、縦へ正妻となつてゐないマノンにもせよ、既に定まつた夫

のある女に戀をしかけるとは何事だ、もう容赦ならぬ、潔よく決闘せい。』

『うむ、その位の事はあるだらうと思つてゐた。よし、勝負しよう。』

彼は簡単に云ひ放つて腰の劔を抜いた。シユバリエも身構へた。

『えい！』

僅かな隙を見て飛込んだシユバリエは美事にシンネレの右腕を刺した。卑怯なシンネレは未だ服しなかつた。

『何うだ、まだ負けたと云はぬか、よし、ではもう一度勝負してやらう。』

彼は落ちてゐる敵の劔を拾つて與へた。

シンネレは劔を受取ると猛然と突つかゝつた。機先を制せられてシユバリエは左腕に傷を受けた。が、戀の念力を籠めた彼れの劔は、再びシンネレを倒した。唯だ一突、シンネレの傷は深かつた。喰しばつた齒の間から、微かな呻き聲を洩すばかり、身動きさへもしない。

シユバリエは、首尾よく勝利を得た。歡の刹那、次に來るべき知事の復讐に思ひ及んで、絶大な恐怖を感じた。

臆えた者のやう暫時立ちすくんで凝とシンネレを視詰めてゐた彼は、一散に自分の家の方へ駈け出した。

マノンにはシユバリエの出て行つた後、戀人の身を案じながら、先刻まで楽しく二人で飾り付けた器物など打ち眺めて、悲しい思ひに悩まされてゐた。聲音のする度に戀人ではないかと表に出て見た。慌たゞしい聲音は近づいた。マノンが出る隙もなく飛込んで來たのはシユバリエだつた。

蒼ざめた顔、左腕から流れる血潮、マノンは我を忘れて抱きついた。』

『まア、あなた、何うしたのです、しつかりして下さい、あなた、あなた。』

彼の女は狂氣のやうに呼び續けた。シユバリエは黙つて椅子に腰をおろした。マノンは慄く足を踏しめて、繃帯を取

り出し、傷口を緊かり結へた。既に判断力さへ鈍つてゐるシユバリエは、マノンにありのまゝを語つた。

『マノン、私にはもう何の工夫もつかない、何うしたらいいだらうか、私は所詮この町にゐることは出来ない、だがお前だけ居残つてくれ、まさかお前まで惨酷な取扱ひもすまい、私は遠くへ行かう、そして、そして、静かに天國に昇る途をさがそう。』

『いけません、いけません、私は、わ、私は何うしても、貴下とは離れません、一緒にいきます、一緒に、もう愚圖々々してはゐられません、ね、シンネレの死骸の見つからぬうちに、早く逃げませう、逃げられるだけ逃げませう。』

泣きながらマノンはシユバリエの手を把つて引立てようとする。シユバリエは黙つて強いウイスキーを一口飲んだ。

彼れは考へた、逃げやう、さうだ、町續きの廣い砂漠を越えれば英國の新殖民地

がある、そこに行かう、そして二人の幸福を計らう、さう思ふと急に元氣が出て來た。

持てるだけの食料品を身につけ、住み馴れた家を後に、纖弱いマノンを勵まし勵まし急げるだけ急いだ、凡そ六七哩も歩いたと思ふ頃、疲れ切つたマノンはばつたり倒れた。

『あなた、もう駄目です、私、迎も歩けません、何うぞ私に構はないで逃げて下さい、私は少し休まして戴いて後から追付きますから。』

悲痛な聲で彼の女は云つた。シユバリエはあたふたマノンを抱き起し、『何んと云ふ言を云ふ、お前を、お前を捨て、行けるぐらゐなら、二人斯うして今日までの難義はしない筈ぢやないか、ねマノン、確乎してお呉れ、苦しうだね、水、あつ？、水を忘れた、困つたな、仕方がない、ね、いゝだらう、一所に休まう、そして何處か私は水を見付けて來よう、暫らく辛抱しておくれ。』

『いゝえ私、水なんか欲しかありません、では少し休ませて下さいまし。』

マノンはずつたり横になつた。と復たむく／＼と起きて、静かにシユバリエを引寄せた。シユバリエは彼の女のするがまゝになつてゐた。物云ふ氣力さへなくなつたマノンは、疲れ果てた手で出がけに施したシユバリエの縋帯をしなほそうとする。

『いゝよ、まだ大丈夫だよ、それよりかお前、休んでおるで……。』

マノンは黙つて、猶ほもそれを優しく巻きなほすのだつた。シユバリエは熾け付くやうな愛を押えて、素直にその爲すが儘に委せてゐた、巻き終ると彼の女は復たぐつたり倒れた。シユバリエは、自分の着物を脱いで、マノンの下に敷いた。そして冷たくなつた彼の女の手を自分の懐に入れて温めた。日はとつぷり暮れて、静かな夜の帳が下りて來た。

彼の女は昏昏たる睡りに陥ちた。シユバリエはその枕許に悄然として夜つびて坐

つてゐた。その中に長い長い夜は漸く明けかけた。見渡す限り茫漠とした大砂漠の中にマノンは戀人に守られて静かに眠つてゐる。シユバリエは彼の女の安靜を妨げまい爲、息づかいさへ注意してゐた。マノンの手は突然激しい痙攣に襲はれた、シユバリエは、慌てゝその手を取り、自分の胸に押あてた、心臓の鼓動がマノンの手に傳はる。彼の女は微に眼を開いて、僅かな笑をさへ見せ、細い細い聲で、

『あなた、私は幸福になりました、もうこれがお別でございます。』

とシユバリエの手を犛と握りしめて、

『永い間深い深い愛を受けましたマノンは、あなたのお側で眠ることが出来ました何も思ひ残す事はありません、何うぞ、何うぞ、お身體をお大切に……』

聲は途切れた。

シユバリエは周章で擁き起し、

『マノン。マノン、何うした、これ、緊かりしてくれ、マノン、マノン。』

微かな紅の色が颯とばかり頬にのぼつて、マノンに再び、眼を見開いたが、呼吸は次第に迫つて来て愛人シユバリエに抱かれたまゝ、幽魂は空しく異境の空に消えた。薄幸であつたマノンの命も遂に荒寥たる砂漠の一夜に封せられたのである。

シユバリエは絶望の極、マノンの兩手を犇と握つたまゝ、身動もせず、静かに自分の死を待つた。既にシユバリエの身體も困憊し切つて、飢えと悲哀との爲に刻々として死が迫りつゝあつたのである。彼れはふと思ひ返して、提へて来た劍を抜き戀人の爲に悲しい仕事にとりかゝつた、彼れはマノンの墓を造るのである。砂漠の砂を掻き退け、随分深い墓穴を掘つた。そしてマノンの肉體が直接に砂にあたらないうやう身に着けた限りの着物を脱いで、戀人の死骸を包んだ。それから幾度か逡巡つたが、遂に熱い、最後の接吻をして土中深く葬つた。哀愁の念は犇々と胸に迫つて、間もなく彼れも正氣を失ひ戀人の墓の上に倒れてしまつた。

ニウ・オレアンズでは大騒が起つた。通りがりの一人がシンネレの倒れてゐる

のを見て急を報じた。幸ひ急所を除けた突傷であつたので彼れは直に息を吹き返した。そして決闘の仔細を物語つて、男らしく戀敵のシユバリエの爲に有利な辯明をしたのである。一知事は非常に悔いて急いでシユバリエの家に来て見たが、其の時は既に二人が立ち退いた後だつた。で、八方に人を出して搜索させた。其のうちの一組が三日目の朝、漸くシユバリエを探し當て、町に運んだ。昏睡状態に在つたシユバリエは町人の手厚い介抱で危い一命を繋ぎ留め、病床の人となつた。

三ヶ月の患ひは彼れに平靜な心を與へた。鮮かに恵みの榮光が見えたとき、彼の幼時に受けた教育の精神が甦つた。健康も次第に恢復して新生涯に入るべき確實な決心に變つた。シンネレは前非を悔いて彼れと共に、マノンの死骸を、静かな谷間に改葬した。葬儀の費用は一切知事が負擔した。

彼れが病床を離れてから、六週間程たつた或る日、川岸に立つて見ると遙かに一艘の商船が見えた。船はだんだん近か付いて、唯有る岸邊に纜へられた。多くの

人々の降りる中に、彼れは可懐しい一人を見出した。病上りの身も忘れて走り寄りその人の手を取つて泣いた。

『チベルヂ君！』

それは永久不變の親友チベルヂだつたのだ。

『無事だつたか！』

唯一言、二人は相擁して泣いた。

ドグラス港發のシユバリエの手紙を見たチベルヂは、一たび彼れの無謀に泣いて怒つたが、田舎に在る彼れの嚴父が落膽の態を見るに忍びず、勇を鼓してシユバリエ救濟の長途に旅立つたのである。そして途中様々な危険を冒して、到頭、ニウ、オレアンズにシユバリエを探し當てたのである。

シユバリエは、此のチベルヂの深い友情に依つて再び本國に還ることが出来た。

しかし彼れは遂に慈愛深い父の生前に逢ふことが出来なかつた。

世の中の出来事は、さながら、大洋の面を遊動する空しい波浪のやうに、人生の喜怒哀樂も、湧き起る萬波の跡形もなく一場の夢か幻と消え失せるのである。新生涯に入つた彼れはバツシイで情けを受けたローラン博士に邂逅ひ、身の素性を詳しく語つたのが、本篇の哀史である。

追曰。シユバリエが博士だとも、原著者ラベ・ブレヅオがシユバリエだとも云ひ傳へられるが、何れが眞實か、誌し置くに止む。

大正十二年四月二十日印刷
大正十二年四月二十六日發行

定價 金壹圓五拾錢

青

譯者

龜田

春秋

春

發行者

馬場

駿

東京赤阪區青山北町四丁目八十四番地

發行所

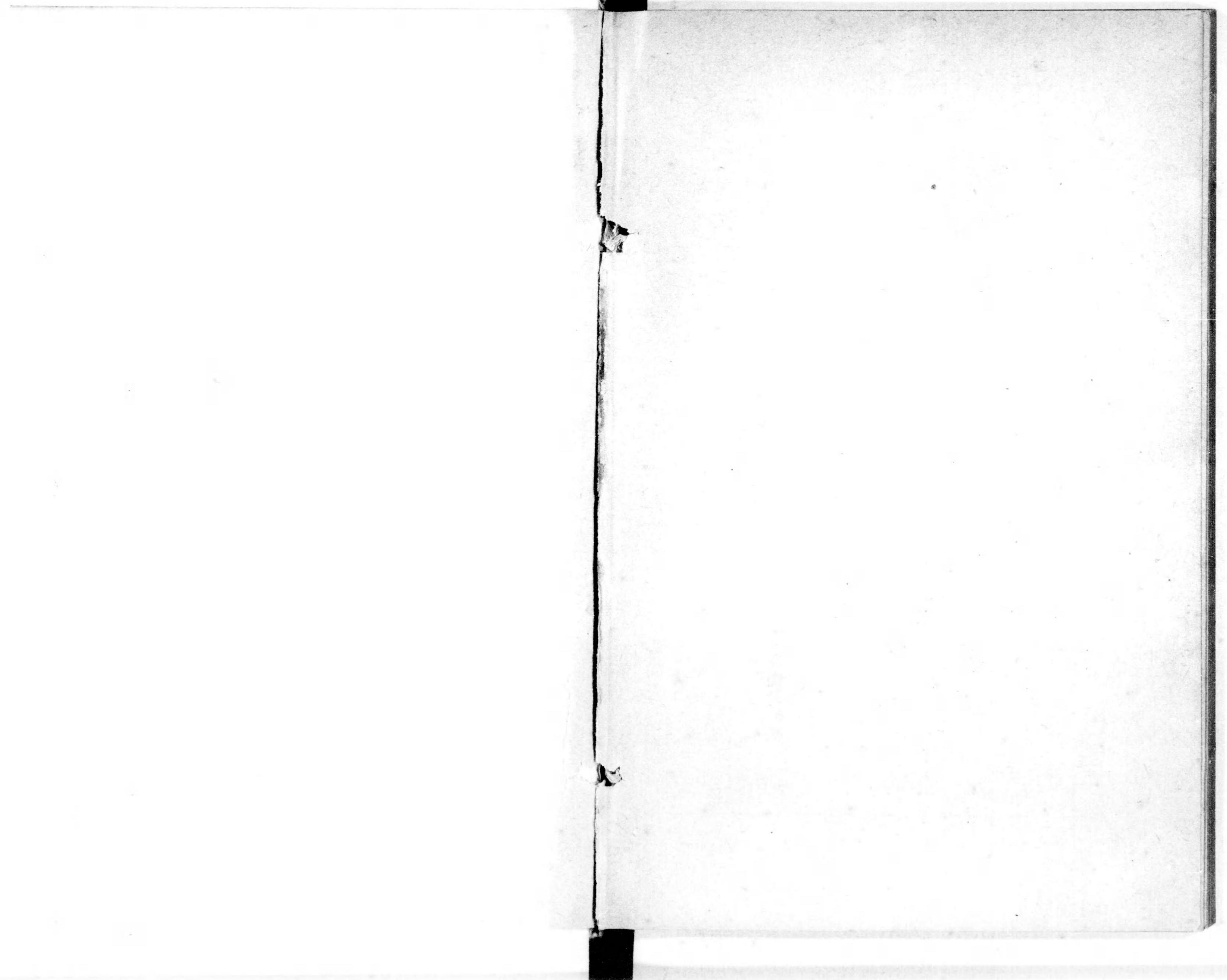
赤阪區青山北町
四丁目八十四番地

國民文化協會

印刷所

小笠原幸吉

東京市神田區豐島町三十四番地



290
214

終

